陽春集

正礼
七〇五

ハ5
1443

5
門 利
婦 1443
巻

帝國圖書館藏

昭和十六年十月十日 購入

帝國圖書館藏

吹の穂

新り

元文二巳の年三月治東雙林寺の
住職なる僧の七回忌の追福あれい西云除ちゝ
秋宗の作代の社会あり浦の風景の面影
そなはしくもの新れもの社をとゝ祖神とおもふ
かゝれて表更玉束の三月孫子雑こゝ
新昌人爲やもようれも

馬三里子
五年吹稿

[illegible]れ錢の匂ひ異なる例の中河内桂坂
[illegible]の松を踏て多賀廻りさるる世[illegible]
吟あれて社[illegible]し[illegible]行[illegible]る并にへり

嘯[illegible]れ月風[illegible]る[illegible]哉
[illegible]に[illegible]て[illegible]れて[illegible]の[illegible]
[illegible]い[illegible][illegible]と心[illegible]
[illegible]田の[illegible]の[illegible]居[illegible]り[illegible]庭[illegible]と聞き
[illegible]れを[illegible]て[illegible][illegible]をかむ

[illegible]りやもちかけて嘯の景
義仲[illegible]の[illegible]に[illegible]

[illegible]の[illegible]やかのをみれ草
[illegible]望[illegible]の[illegible]れ[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]

[illegible]や[illegible]の末 細

[illegible]井寺
[illegible]僧正[illegible]て說[illegible]
常[illegible]の[illegible]
男女[illegible]
[illegible]尊[illegible]観[illegible]
[illegible]八[illegible]
[illegible]

又様はちりさまに三井の紋所と徳
廿八日
けふも又楼居に帰りて古き歌ども雑書ともみなさせ等
余をとられは名ぞのりなひはそうり上綴りし遊し
り歌の物かたりをとかれられ雑談を慰みけり
廿九日
吉野紙々楼居をとらせて一蓋諸院の森をみて
白河をへて吉田吉如堂永観堂の中なる開帳を
拝し南禅寺の案居に休ひ豆腐の名物に奥退
りくれに帰宿せて

晦日雨　洛中　洛外り
停歩は元の所からて祇園清水の坂々をみて安井
金毘羅まゐりはるにのほし八坂高台寺山下
河原三年坂青竹の院地を拝み祇園さまのちさま
寺田村を奥の院車宿り馬をやめ所々の信行堂
六波羅の清盛の塚を拝し建仁寺へ行て…とらむ
上の所曇天下の方大黒カラ草堂清水寺六角堂へ参りより
折言にるの又様の宗武命の塚よりゐ紙屋を過
雑下卸そるむ熊ち因幡薬師の古めしく五条の
天作の物さひある錦の天神へ参るり新玉津島

東西のあそれる壬生東寺知恩院大佛の大鐘なん
此外札の桜をひろくし平野なん二度人々とおとろきて　如比院
智積院東福寺なん楓の葉さそる
　直にまて飛ぶをものあみれ紫ノ时
三月三日
　ことし浴沐にありて恭の日を祝を
花の雛も年ふ九重の　奥住　居
我も雛の仲間でものかりつ座舟　庵之坊
然るに禁中の御歌会清涼殿は紫宸殿を称しそれより
お召人社参し風雅の実を行き来れ中社遠く
年々にお励まらつりし由まて

此もむと行くまで御心かり給ふ
四月五日　清水　愛宕山
然るに此まり風流ありてやまのむらし此方に集めて
ところや庭清の花ちる澤の代は中家ありて筆の飛より
花に将しふち笑まる初心者を招き五大堂　南谷
う喜をとるておそえ一の名井試の御を越る
かけろふすよあおりのところその流れ
　清水
清水の浴のこぼれやあれさくら
土器なけま具して五千町よりのほうり鍬(カキ)の名井まで一

町毎にもうつの石あり俗に弁天堂あり俗に一区
お社を祭りしはの橋とてつくりかけてこれも
あるべきかとて和歌世産のおもかる産に石に
鶴ととうて手仕給ひや江戸義の旅さう

五九

好色流女王牧母の係三宝ちに流に大道に花りしらや
二ち後ろに陸奥紀世の後と解しわ宝山の寺の伊
うて色ふふいてふる時の辛ちに後とてわみ宮
ちにあられと仕て

あるのみやてうちまて花の雪ち離き

ありし橋いひとうてちまの空をみる宮山いかに
めくくとけける

あらふふつかいやちの宮ちに
臨川寺に夢相国師の五位にて川端の景ち
こ軒に年なみ脚を
あるもけに宮ちとうせの原に宮ちに井川ふれたる
後月橋かれり向ふに社稷る擬合宮いれの尾の
拝社にて小鳥ち宮いに年に尾のゆうあり月和歌
を仕めくちんに流ちいやくるを至て源家の絶
景い宮ちとうとうし杯ちにちいに詩歌の古人に

もろ〻の社をも給はりたまへるに社司
ありさくかるとそれ
波鼓とはくるまの深緑の木をもて
天然ちの給ふの景色と奥しく磯を接田を作りて
松の尾の神をとりて大井川の舟をもてし極楽の
望景なる松の宮い橋氏の祖神をもて二十二社の内
ちとりたる美をもて保元年一行
七日
大仏殿へ参詣をもて足をもてうち大病のうし
御所をも船をもて雑仕へ

もろの木ども色づかりの後界ふんさとい
後羅錦繡と云へりとも蓮一枚の錦をとゝろ
かしとも風雅の骨とも為されまるかゝる風流とと
もしくてみれい俗さもいとをさも急と喜して
砂里茅鑑と撰中の茅を入きを始めて頼みけて
雨の晴れの月を誘ひ我と共に我と慣て今宵い
はゝて来のまれるる

芳のまもれもりるあるの自い

十二月

八幡宮清水にて やさ社橋敬生門と元の神殿を

ちかい宮殿の雨を作られて今鶴ゝ降りて
此年月風雨を行く車馬を流て吹て度ぶと
ちくも平生後へ立ちて物ゝ一星ちり皆家
周ちて立橋も色ぶ此風思ひやられ行る

名月

山吹ゝ名月ゝ名のこと 名のやさ
春の世と 鈴鹿鑑行の本 駒沢の松忠綱ら 陳の岸
い宴のあ水と 梅れ宮ゝ
とゝかけいもうゝ みをて 梅の 新
宮殿橋ち 慣美の情 沙寫 真慰る 高ら後 宴ら

嵯峨をかりて黄みちはつくろふの節の比より廻廊にして
禅師をおきて一山の稲ね寺をもて二居めぐる六地蔵
笠の森稲荷山深谷の西へ　世を宇治山の西に物して
なされて帰京し給ひぬ
十四日
此日雲飛ぎくあるしまゝ行して諸国の好士を招き
雙林寺にして法会あり私祈願りの懐紙たゝくへて
鑑定と第子別に百韻の御連歌は三流に縦横の式
連中七箇国人数三十二人なりまた五日絵芙をた務る
席の上に俳諧自画の讃　其の余はをまゐらせんと成

卓上信禅師居士焼香有之了寿宝山般若開帖
并ニ謎文ある讀さて論を此日性空をも五ゝ成ゐかあら并んか如睦
も宣よ所まて名は法語針を立ちる一ゝ香ありけ十六日
為西りに店まて讀経あり前庵にて性空を立らひ
寺るる茶飲了の支度をつけはるくし奉りて居ゐけり
様ゐて路林寺の門のまへあり
十八日　路林寺是をつく寺庵の設之あるとして
経来りけ奥りけ懐紙ゐ相四名らく
廿二日　一椎ニ来り奥りけ
柿の百枝をひりて人々来ゐりし
一椎子よ申されて

首尾吟　　　　やゝ坊

町の名は柳さくらじ　　櫓通
菜よおしつれはまれ　　燕一推
出替の妙は少絶す浮きちて　　音吹
便るあてさの寺ふ　　傘杜音
しかの間よ月をかけて松の上　　蓮掌
旅よりうへの寺の用ん　　之
雨音は山かの夕へ匙さもよ　　推

小鳥人は宮後に見ある　　吹
精進しあれ幸もり行け　　音
名まを館の世りあめて鳴　　宰
山関の三を様を松の花ん　　之
さうはみ宇はをなよまい代　　兆雫

推移

さくのなま生浮来とされあきて冬の一推移よ
あさふ少なきのかよへは物さ川からさ花をさく

[illegible]に一日の写をうつしてこれ
[illegible]て眺めつくさんとのむ　吹

[illegible]に
一枝[illegible]高[illegible]る[illegible]金閣
[illegible]て[illegible]
[illegible]て[illegible]
[illegible]
[illegible]

金閣　衣笠山

[illegible]千束舟[illegible]山を林間今宮の茅居
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の東相国寺[illegible]
[illegible]

松をも年ふるやとりの跡　屋元

豊かなる相領の　家山吹

新の船に都の住ふくらむて　吉歌

人ちらす行く似あり　桜花　本徳

入船に仕るめるやうの月　詠

橋の柳は　吹たち　花

おもをもぬ引を庭の自陽て　只

人法をつれもうつて神く　え

命風をかけて　仙

いとく宮の植れぶ庭　吹

都さくら咲て上みあかるふる　た

風流て　色　ものの　え

毋こそとも世てまちの遊び好　え

ちぐ山は　の　源八の宮　只

峯かすみ　れと　松の面　吹

光おもる　粧ふ　酔さる　仙

霧立川より猪も蹤をきあれて　之
目にもみねる此日の　椋上　た
荻葉の末て峯得る風る吹　只
一旦川の　ひくも　一旦　え
さゝぬ砂へ返て酔をかへ　た
峯渡が　流れ松に寂ふ　吹
岩ふ往来の人をもよくふ　仏
あそ比もあれ雪ま日　之

人　撞木

霊嵐院境内山只亭には花の月とんにんあらる　祇園
清水の祭太鼓をうちそよて　吉田宮居の寂寞
そうる森の新古ゆ此国の宗をさゆるをやをして
情きんき詠よ風雅よ宗をふるる勝地をいうへし
隔おるかりふえるや漾の森林の音　吹

九八口

あやまる所あて骨堂をねまて娘る三回忌を
おもひよそて追悼とおかれる事をも此曲を
そへ悲彼社をとひなそもの息の振をひやるし

昔よりふたゝびこゝのむかし哉

此船に乗て又大坂へ帰さ道ゆく人の聴を
おもひやらんと蕪子か言よこしける

此句に對しておもしろき句なと今日は旅ゆく
志くれてなとゆかえけるにあらしもくたりくて
書くれるを祝して

也無紙いまて墨染のをひのまゝ　蕪子

身を旅に託してあるしに　章吹

三月晦

ともに旅せの春やとり都のむかされ難波の月

ともなひ来るもやかて京へかへらんとて蕪子か書
あつまれて難波より京へのほるにも跡より此道を船に
取りて酒二樽を漕せて

船にわしむすやりるれの春二月

其次にて冨田なる伯兄か家の二階に杯
を上て遠見するに天王寺の塔は雨中に朧ろ
なく千日の鐘はまちまちに聞えけるに
すへて常をかこちむ寅は哀楽の変を感せしむや

むかし来しちるや千日の鐘にくれ

和月朔日

雛祭を更衣と祝ス

その浪花の芦に　更衣

蕪よりふ世毎に去年分けるふるさとをふるくに住

さとらてらをへ住さるさとの姫をとれハと

ふてとれめくくやる時や春の通ひ燕

帝ハたのりさ来ると祝して

松ちとくしもさくし百合のもひ　春映

宜朴そう語を学ちうれ和一人来りてうちうる衣の

句ちく蕉ありて脇あるんと紙

その浪花の芦よ　春の宜朴

らるるかまらくく　春の宜朴

猶ゆよ　花よ庵その草庵で　蕉

二月

ひて蕉あうちうとさて高みけりとそひ　曉

ちる紙花をちちちる

そかて　そて紙やあるのの紙稽

日や花を知たりよ去ると　堺ろさいてる

すゞしさや　東植や　このかはゆくの道
此川ハ竿のおりにひよ見さくらなりて
秋うつよる舎雁日和や　天王寺
住吉　四社御神を拝して
神のまへ　言をふかみしの　夕松風
ちあひなるをことくり堺か国なる藤鉄をたてまで
出船とる　三日市に宿を
此所の後に金剛山をひかへ西と前の山く作るなる
千早の城跡は松下にかくれてそこのまくよに楠か
忠勤の跡ありなるのひしとそひよくておきたり

そのむむとて忍ばるゝめ
三日　此里を立て此あたりの苑辞すの中西峠越る
みちの日　紀の国　三日市
まづ此国に佛のひ紀ノ川辺に難く御寺
其に作るをえあるまる御寺僧にかたりてまかる也
ここにきのお寺を廉て紀の川辺
ちりと此の社をよもちの日あるに山くをいつち
作りて此の寺なりきし高肌に徹してなりに
せかる宮に様のひくうるゝ今と鹽に暁をきなくに
ひかりし　紐しあかり　難行はそひよくもれておゆ

ありしなりしひろめて經塚とてさかやかくれ
とらぬなりて和尚に宿りて

四日

おき出てあけぼのに下山けるに嶋かゝりて日まで晴れたり
かみの総菩提寺とて不動坊に分けて寺坊その
ところに切すけるにきれいなる寺に八幡ありて以前寺坊と
なりたるさりしを問ふとまたわかるに裏と
さくらさき
踏込ろ道刺(ハリ)ありしやいかむかう
仏さま不動の仏像にて安く堂下馬をそこらに坊くと
過て奥の院を登りて谷にくだりて古墳

さつきの多田満仲五郎十郎敦盛熊谷七の石
駿河大納言卿母公の石塔の高サ二丈余計りして
一山中一の石塔とやこれ外に代々の石塔の囲く大寺
のなかにあまたありて記せすはかりかたしこゝの
橋にて柳本云上人に詣しけるに其名の一の寺
多くの画かき安藤紀重石の碑勧進所に入るさきの
地蔵を切の地藏利遊の佛にかかりて立の池
にて見ゆ学者衆の廟とて外にもとも成るを一夜
て歌よみて清めてまいの庵に泊めて
菩像のかけや一味の山清水

御影堂ならびの一切経蔵四月堂に秘文のまき
骨を納る奥の院にあんくせむ三語にもそへて只
ねらしく鐘楼と宝塔のならびて金剛なりし
そもそも中堂へも金堂 大塔 西大門 東に近き堂
の松 東堂 西塔とあるを見り中門をわたりて先きの三鈷の松居
に集ひし人らは千本松七本松の木なれ
岩に見なるとりて上の岩なる石の雨をかゝひ御母と
かくしるべつるとぞいふは其の門の跡ありしや
さて上の宮や 蔵し太をひろけ
かゝる石に苔むしてまつりたる大石の中間に

天金剛の如く鏡の形なり大師御作を試みんとて
神まもりて石面をぬぐひ拝する身自らおとろえるよし
秋山旅つれさ識りて
やごとなき神のうつし鏡石
ひと所とるにやなる池といふあり小さき
ほとりに古松尾上にはせかゝりて池の水をおほふ
おもひ出其色鏡を写すこととしおもしろくしばし
眺めし二つ三つをとりて本社へ下り丹生高明神を
祭れる所堂八幡宮に在所の奥にあり
みなかたにて御身に一夜をぬさて

六日

天神を山つくしひみあまたこの脇のさけるとふ大神
守護の神とあがめたひ時新神と封ぜらり
新神山とゝして矣おはしまし矣保ぜるて慈尊院
封へ此七社の四神ゝを祭る正一位冊せ大四神と
称ゝあり中ゝて式神ゝいち所ゝ祭ゝてゝ
はゝゝゝられへゝる所にあるめなるゝ慈尊院の奥
弥勒堂あり所毋君の入定ゝるゝとやみりゝ書を
祭ゝる弥勒の像ゝ所一鏡の像ゝ拝業寸一枚の豆
像ゝゝて所拝へ祭ゝて、燈鉢七盃鉢鍋杖ゝの
祭りゝある所ゝ封くゝと山封ゝとゝてみかゝ所へ
ゝ山のゝ寺ゝ山同ゝ仏ゝ所ゝ寺屋

六月　堺　夷嶋

宮のゝ所ゝ所ゝ眺ゝけて目をゝゝて武庫ゝ山甲山
浜ゝ山浜ゝ岩ゝ山住ゝ所ゝの寺ゝゝ所上へゝゝ
て所ゝ所の情ゝ山ゝて所ゝ所ゝ山ゝ所ゝの帳ゝ所ゝ土遠
近ゝ寺ゝゝて四手ゝ寺ゝ所ゝ所ゝ寺ゝ所ゝ所地也
　　松ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ
ゝゝゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ

八月

淮仏やゝ所ゝ所ゝ得ゝ所ゝ寺ゝ弥陀の浜

十二日
清水　新清水
清水や嵐は新築の石垣時
清水より西笠は篝衣の名残や枯れたる一心らま
旅て西村氏宗本信士の塚に詣てゝ此郎と称とて
生を同して塚界と隔つところにぞ多くの文通ハ
千里に遠かりきてん風雅の表現かよひて後の名の伴
ひとり尊ていひ合をしてのしらみ末への数にさん
きつる事ぞし此塚に信て来るハ行月りの
三日あつかりし其中の花を見るし水をおくるにハ懐旧
の詠をなせる

塚もこれも香をと橋の一心寺
天王寺より生玉の御社にあそびかへりて帰宿て
十八日　須磨　明石
昔北里のことをとふて神崎を右に淀く西近の辺
を越み川の左る難波の里呼ぶの声や此もの枝ハ
在の里にあり尼崎大物の浦静出家の森ハ梅の枝に
ありて人の家を隔ての御作西の宮沖の夷武庫の御作ハ
廣田の大神の宮として一の宮ハ御記志れきて鳴尾
の里鳴尾の浜武庫山ハ東にて甲山は北にあるや
風もかほれあやめにちるよ甲山

一ちかい山　ほうく山　ふるさと

武庫川とてこゝより廿丁ばかり侯爵の松原あり　やの宮　嶽尾

たまの宮跡八町ばかり山をのぼりて　ひろ池かれたる跡

ちかくに　四社明神とおなじ　まる

まんだら　　伊弉冉　白石の名所

あのもとに石ぶつ　ぶくしのめ　伊弉冉

麻耶郎山

物部天上ると称あり　塔ばり　大町　ひろて　頂上

ふもとに石階二百余段を登て　本堂にいたる

天竺のゆ字とあり　ゆやのて上寺

走たちのさとりをひらきて　釋尊に仏しい

祈ら入れかゝるとて　釋尊　仏記

はたしいるやしてまんだ山の奥てしいて布哥の

滝あり　上七男滝　中　下　松杉の生立も

ゆかしきとてひ〳〵くるる所ありて　女滝ありさぶる

暗おかけうること

滝ちかくて　生い立ちの杉

生田川生田の森　表忠碑の杉　長田の神　兵庫の

稲荷　清盛の石塔　知章の塚　忠度塚　二基

の杉行平　在綱　おさ　永禄　表　脇付石　おされ杉

楠石塔に押石と書と、寒し。溪川ふる改行らいと
そふ

鳴呼と呼ばや鳥の墓とまて

早苗とも れのこるれや溪川

矢三郎の深さるて安徳天皇皇居の跡和田の里稲田
の宮松ヶ枝取と詠ぬて此松一西法寺に家を校む
詠て後ふる吟ずみかく冷様さるるるる
ちるしるしるされ おのれ此浦の風流
と時ふ

寒て行くさきちるおやまい夜ふる

稲ふる山 月りんの松

ふるる 本ちや 月ちんも ちりの関
西法寺の裏に松風村雨の堂あり二人の墓ある
宮ちり 故宮へ行くふる 行年八幼にして
松風村雨とめられり

頃(カイ) ちんの沒ふも ゆえに年なのむ

九日 法ちる

義経の腰ゆ 春ちう陳錦 神功皇后の鈎竿 竹
丸手孫 皇衛松 敦盛幼かの跡懐帝 敦盛三尊像 藤
敦盛ちる初鐘 ちるの笛 弘法作 敦盛笛 光義作 敦盛三尊 名号 源空
保衣の石 年 熊谷 丸手孫 前れ弁ちる ちのく 明恵

一の谷

一の谷は西に向ひたる山にして　後ろは
鉄拐ヶ峯岩石なり　鉄拐は仙人の名なり　内裏の跡　敦盛塚い
五輪塔にして三尺ばかりなり　五百五十四年の
昔氣と色あり　出伊いやのあり　ここにおはしまして
百合さくやこの浦の　の一節の中
二の谷三の谷堺川　関屋村　塩屋村　仲哀天王
の五色塚
たけりあひて　草しも　秋ふかみ色塚
そぞろ淡路をながめつつ　向ふへ　ながめつつ　淡路

淡路をながめつつ紀州河内の連山かすみ　淡路富士を
ひかへあるかと　たとふ　和田の三崎　名所なり　海
中へ出ひかりの帆　をあらそふ　ながめ
のかすみ　ちらも　淡路一般の　絶勝の名関
こゝ　古今見観の雅趣　とゝもに　浦々
面一年年の　一時　みちる　家の華を　恨ひ
笠の上　笠　ちらして　時うつるまで　眞っ入ぬ
　　笠　淡の　あらしを　淡戸　明石
　　印の　や　淡　ながめる　淡路　しま
明石人丸社

柿本大明神と称あり妄杖の極所やうに弥生のあたりに
押しうゑあり四石たる表に長田村と記して西岳
とゝかゝれたり

廿一日　こゝは尾上　尾上松原に住吉の社あり

尾上の鏡　おなじ松

ちりをさで鏡とぎけるや尾上の松

こゝは尾上の鶴の巣松　てんくとなりてこゝにひ
巣もちる舟をもや

高砂の浦とあるもこゝにふるの巣

元の宝殿の姫路と藤見の山中にあり大社なり四神殿

播磨の二神まのことく別れたまひ時天女降て一柱を
社を造らんと撫るに既に成て起立するゆゑに
あるゝて頂にふるゝもちゝを孫に天上しまいらせと
宝殿の姿神妙あるゝてゝいとゝ

宝殿もかゝとだにみるや夏の月

曽祢の表
曽祢相公住の所　松林を地中に埋て屋敷と学校に
折言て帰路を祈始て　こゝに松を植て
とゝに伝て神籬を作て　大神と称して　松のゆゝとさ
一丈八尺　こゝに心をて　二丈三尺　一の枝十八間　三ノ枝
十間

余二の拔ぬけに空して山中へ人と四人と入る
古今雨雙の名を世
学もしり　松とも　神し　下もて
とゝゆ姫路三原氏伊予京之高もあるゝ海
風諫人て伊予ゝく慶之伊
廿二日　書写山へ詣る
姫路より二里計と色て桔梗ら大町ら大なる
観音　丈改建を　三つの堂清盤奥院性堂上人
年来之鏡代　学文而　西大納社　姫路代ゝ御墓所
姫路ノ懸いひめ　ゝ男山　ゝ山也　池田の前

長谷の跡　ゝ寺　ゝ尋ゝて　ゝ伊前を
廿四日　姫路三原氏と立て　廿六日　難波へ伊る
九八日　高砂の伊ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝて　拔舟の　九九日　橋　ゝ　伊京ゝ
尺ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
て　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
朔日
芦屋ゝ　ノ日　ゝ　伊路ゝ同伴ゝ芦屋ゝ　ゝ
七ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
稲荷　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行末ゝ所にてあるゝ武門のゝあるゝて
はれゝあやうとかはるゝと言ゝ粽とゝゝて五ゝら
四てと祝ゝやまれまるゝゝかるゝるゝるゝぬ
菓ゝとかはゝて山紙祝ゝ　魚粽

六日

芋中五菓ゝにやるゝて粽と言ゝゝゝて五ゝら
旅ゝと祝ゝるゝ

はゝゝまるゝ中も耻ゝ　魚粽　五菓
奥ゝてゝゝゝの　はも　陽も　草吹
貴殿ゝの方にもあれゝと柳敦ゝゝゝゝゝ

来ゝて芋西ゝて洛東の和歌ゝ旦敦ゝの風雅と
祝ゝて

懐ゝ中や淺ゝの酒ゝや　草吹
めゝゝあゝ日ゝかはゝ笠　柳敦
言伝のゝゝことゝゝゝやゝて　五菓
馬童ゝの伴て柳ゝ伴のはゝの
めゝゝゝゝて　ゝゝゝゝ
とゝゝゝぬ

くゝるゝのゝゝゝゝもあゝ　郭公　柳敦
時ゝ新菓世　寒ゝ　末松　馬童

呈五葉子

五月九日の夕なる五葉子やとりて帰京の旅
拵を勧るに一とせ芳躅をしたひ〳〵こゝまでやさ〳〵い共
俳句ゆゑ捨て置くのみとせの祝詞あれへあやめ
不盡の住居ふらんやと百あまぬ暗香〳〵
おもふことを武てものこりやや

代を重ねたるあやめ九を清れ　土芳

六日

四むらの門めぐりくらく帰庵し行らめ

帰郷ノ賀

[illegible]

[illegible]

[illegible]

拙くよし行けば蛇一筆の跡　松角
瓦合もしらぬ人は筆かとて行方　国志
筆めけいてやく新やこれ　竹　柳青
かくびくさやいくみくつる　山　冨中
成るりや用なしもしてあること　国芝
其筆もしらぬ測りをと行方　芳水
行けよ其もしれぬ一枝歌　玄峯
北らぬ合て詠のかはるし徒合　右松
松柳の筆はてあるこや　かるる山　山指
菖蒲湯の松宴しかはれ照　起朝

咲くまれりやめくまて　月車　松青
帰るりをてあるこや　松柳筆　可国
賀新年の松柳筆や百合　在方　友志
松くまる神のまるし　寿　可青
筆の筆や　ばりて　竹　砕有
筆めりて流の新筆　月　毛　之安
をとりよ行えて　かるる新筆哉　志れ
日く流これ筆や　帰山　真友
行けてこをし筆　新松　町水
帰るりの時こや　こてあるこ時　嘉祝

[illegible]て[illegible]の山陰に　似雲
[illegible]の杖にはかなる行の[illegible]　可拙
[illegible]の[illegible]むやなぎの[illegible]　揚巴
[illegible]けてゐるもあるかや　桐のむ[illegible]　抑志

帰雁

雁伝人知れずすぐらんものをうられぬるかな
はの[illegible]石し比叡[illegible]岩[illegible]や鉄拐の峯金剛山
[illegible]し摩耶し書[illegible]山の峯くらう人唐土天の
[illegible]
[illegible]

[illegible]の海風もさすら[illegible]
[illegible]の春月の[illegible]
[illegible]

[illegible]や　岩[illegible]の風車
[illegible]　馬童
[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]

ウ

五月雨の頃

夏の夜の月の明きを　右板
寝て望月の心杵　作　橋下
かなたの高きに世しらず　可推
曲物刺る分のうつろ　板角
ちらほを観ぶ水ぶくれ　高峯
田なる情の音　松風　芳明
ぶり燈の焼ぶの鈴の声　起朝
ふるふるとうけよ雨の洗濯　見品

秋の中し月の明きを　心指
元禄ハれのまれ　作　笑れ　柳音
かなかの鳴を掛屋に嘆あり　名
蓬ふれい光みげ出む　指
焼ふふ雨ぶ月もめる　之
漏ふうしふ　笑
もうもう千鳥ふ付て　宗鶴　角
他岸とかけて多摩の連　概字

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

皇和安政二乙卯歳
神無月中二日
一無尽亭
所